

ずいそう

未来予測ゲーム

黒川 洋之



今から半世紀ほど前は、コンピューターが人間を支配するというストーリーのSF小説に出会うことがあった。それらの話の主役たるコンピューターは、いずれも人間を遙かに凌駕する知能を持つに至っていたのだが、今ほど生活に入り込む前のコンピューターには未知の部分が多く、その主役たちが「意思を持った恐怖の怪物」に成長することに、読者がさほどの違和感を持つことはなかったように思う。

しかし、コンピューターに搭載したAIが人間よりも賢くなる未来が迫ってきている現代においては、逆に、AIが意思を持って人間を支配することなど起こり得ないということに皆気付いてしまっている。だからであろう、そのようなストーリーに新たに会うことは難しく、AIによる恐怖は、仕事を奪われてしまうのではないとか、人間の際限のない欲望に悪用されてしまうのではないとかのリアルな話になっている。

ところで、なぜAIが人間を支配しないのかと言えば、人間と違って、遺伝子を残すという根源的な目的を持たないからだ。翻ってその根源的な目的を持っている人間の行動はある意味筋が通っていてわかりやすく、人が人を支配するという行為も、結局はその目的のための手段と捉えることができる。もし、AIが支配を企てるとしたら、それはよからぬことを考えた誰かが道具として利用しているということである。そう、そもそも、どんなに進化しても、AIは人間の作りだした道具でしかないのだ。

人類は太古の昔から道具を考案し、作り続けてきた。そして、その道具はいずれもその機能において人よりも優れたものであった。そう考えてみると、AIは問題の解決手段を得るための非常に優秀な道具であると言える。もし、超絶的に進化したAIを我々が使うことができるのであれば、我々が抱えているほとんどの問題はAIが解を導いてくれるに違いない。先ほど、現代におけるAIに対する恐怖は、人間が仕事を奪われてしまうことだと述べたが、それすら本当に恐怖を感じる必要があるのかどうか疑わしい。なぜなら、本当に仕事が欲しいのであれば、AIにそれを相談すればきっと自分に合った新しい仕事を生み出してくれるからだ。

そうなってくると、やがて、永遠の命が欲しいという依頼が生じることも間違いないと思う。そして、AI

は必ずそれに応えてくれるだろう。今ですら、たとえば細胞の入れ替えを行うとか、クラウドに意識を上げるとかのいくつかの方法が思いつくのであるから、より高度なAIをAI自らが作り出すようになる未来においては、その解決は造作もないこととしか思えない。

さて、AIが考案した何等かの手段により、人間が永遠の命を手に入れてしまったとすると、先ほど述べた遺伝子を残すという人間の根源的な目的が意味を持たなくなるが、そうなった場合、社会はどのように変化するのでしょうか。人間は未だに他者に対して怒り、時に相手の命を奪うほどの争いを繰り返しているが、これらのことの根っこにも遺伝子の問題があることを考えれば、やがてはそういった物騒な話はなくなり、永遠の平和が約束される理想郷が訪れることになるのかもしれない。

我々は、高度な道具を手に入れた際に、その悪用による生命の危機を回避するための何らかの規制をかけることが常ではあるが、理想郷ではそのような規制も不要になるため、AIの進化はタガが外れたかのように速度を上げることになるであろう。そうすると、人間が永遠の命を得た先にある地球の寿命という恐怖にすら、AIは解を出してくれるのではないだろうか。

ここで突然に仏教の話になるが、仏教では56億7千万年後の末法の世に、天上での修行を終えた弥勒菩薩が現れて理想郷を作り、人々を苦しみから救済すると言っている。この理想郷はおそらく仏教の開祖である仏陀の思想に基づくものではないかと思われるが、考えてみればみるほど、AIがもたらす理想郷と大差のないような気もしてくる。地球が寿命を迎えるまでの残りはおおよそ50億年と言われており、妙にそのあたりも符合している。果たして、仏陀はどこまで何を想定していたのであろうか。

56億7千万年後というのはあまりにも果てしない話であるが、AIの知能が人類を超えるシンギュラリティまであと四半世紀もない現代において、そこまで予測してみるゲームに興ずるのは案外に面白いのではないかと思う。何よりも我々は近い将来にその答え合わせまでできるのだから。